

第 19 号

2010年3月31日発行

藤 沢 市 文 書 館

〒251-0054 藤沢市朝日町12-6

TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172

URL <http://digital.city.fujisawa.kanawaga.jp/>



絵はがき「(江の島名勝)片瀬海岸乃木將軍の銅像」

上の写真は、昭和 12(1937)年 9 月 13 日に完成披露となった、乃木希典將軍の銅像です。將軍は、日露戦争の第三軍司令官として旅順要塞を陥落させたことで、大正 7(1918)年に乃木神社に祀られ、戦前の国定教科書などで大きく取り上げられました。將軍と片瀬との関わりは、明治 40(1907)年の学習院長就任後、生徒を連れて海岸によく泳ぎに来たことにあります。そのような縁があったことなどから、この地に銅像が建てられたものと思われます。

片瀬では、乃木高等女学校(現在の湘南白百合高

等学校)も戦前に設立され、乃木將軍ゆかりの地として喧伝されました。

この銅像が建てられた場所は、現在の江ノ電第 1 駐車場の敷地内にあたりますが、昭和 21 年 3 月までは存在が確認されているものの、それ以降行方不明になってしまいました。その後も、台座の一部が残りましたが、2004(平成 16)年に撤去され、今は案内板と、庭石のように点在するわずかな石があるだけです。(中村)

(参考：大濱徹也『乃木希典』河出文庫、1988 年)

片瀬海岸の乃木希典の銅像 1

藤沢近代史話 関東銀行の破綻(上)..... 2

古記録を読む 第1回 3

古文書の読み方 第19回 4

藤沢近代史話 関東銀行の破綻(上)

関東銀行とは

銀行制度が確立した明治時代、地主や商人は資金調達の手段として次々と銀行を設立しました。その数は大正初年において全国で 2000 社を越えていましたが、一握りの大手を除けば企業体力に乏しく、大正時代に入る直前より順次統合が図られます。

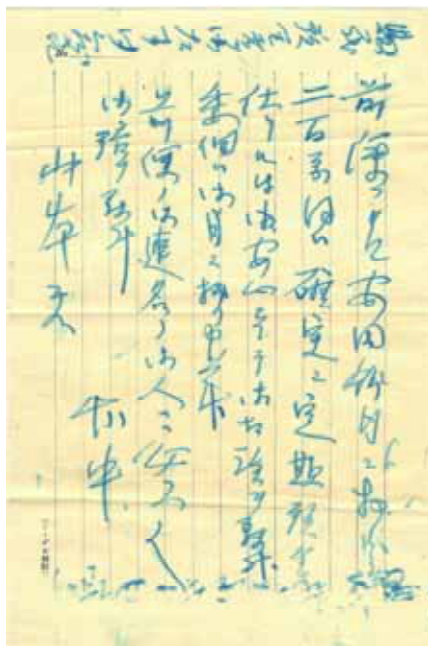
関東銀行もその一つで、明治 43(1910)年 1 月に藤沢銀行、相模共栄銀行、浦賀銀行が合併してでき、資本金から見ると県内有数規模の銀行でした。

不正融資と震災被害

この関東銀行は、本店がある藤沢と浦賀銀行から引き継いだ横須賀周辺を営業地盤としました。ところが、横須賀支店は本店の目が届かないのを良いことに不正融資を繰り返します。隠蔽工作のため本店はこれを察知できず、気付いたときには 1 支店だけで全行の不良資産のうち 63.4%にあたる 220 万円の損失が計上されてしまいました。さらに追い打ちをかけるように、大正 12(1923)年 9 月 1 日には関東大震災が発生し、取引先の罹災で貸金の回収ができなくなってしまいます。

取り付け騒ぎの発生

ところで、震災の影響は県下全域に広がっており、



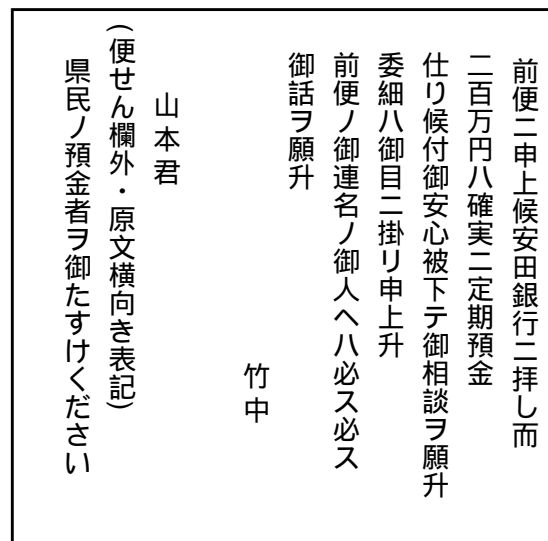
200万円の出資を
内諾する手紙
(縦22.5×横15.0cm)

各銀行の経営悪化の噂が広がるにつれ、預金者は倒産前に自らの貯金を引き出そうと殺到します。これを「取り付け騒ぎ」といいますが、銀行は必ずしも全預金を払い戻せる現金を手元に持つとは限らず(むしろ無いことの方がほとんど)、これが起こると激しい預金流出によって手持ち資金がなくなり経営が破綻します。関東銀行も横須賀支店の乱脈融資の噂が広がり、とうとう大正 13(1924)年 11 月 25 日に「取り付け騒ぎ」が起きて、休業を余儀なくされたのです。

破綻の影響

しかし、同行は湘南地区の中核銀行であることから破綻の影響が深刻で、12 月 2 日に藤沢町長主催の協議会の席上で湘南財界援護会が結成され、県や大蔵省に陳情が行われますが、一方で銀行に利害のある者は処理に奔走します。左下の写真は当館所蔵の山本悦三家文書に含まれる書簡で、関東銀行の重役であった山本松五郎の依頼により、東京府の竹中重太郎という人物が 200 万円の出資について内諾をしたときの書簡ですが、文面からは預金者に何とか迷惑をかけまいとの悲壮な思いが伝わってきます。以下、この結末は次号にて。(澤内)

(参考：日本銀行調査局『日本金融史資料 昭和編』第 24 巻、1969 年)



手紙(左の写真)の内容

古記録を読む

第1回 『吾妻鏡』にみる天変地異 古記録とは

古記録(こきろく)とは、個人の日記や、備忘録、寺社の縁起類等のように、特定の相手にあてて書かれたものでなく、比較的古い時代にかかれたものです。

今回から始まったこのシリーズでは、古記録の内容を見ていくなかで、昔の藤沢の地域がどのような様子だったかを紹介したいと思います。

『吾妻鏡』について

最初に、鎌倉時代末期頃に成立した歴史書『吾妻鏡(あづまかがみ)』を取り上げます。この歴史書は鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から第6代将軍・宗尊(むねたか)親王まで6代の将軍記という構成で、1180(治承4)年から1266(文永3)年までの幕府の事績を編年体で記しており、編纂者は幕府中枢にいた複数の関係者と見られています。当時の権力者である北条得宗(とくそう)家の側に立つ記述であることや、あくまでも編纂当時の記録・伝承などからの編纂であることに注意は必要ですが、鎌倉時代研究には第一級の史料です。

『吾妻鏡』第22巻・建保4(1216)年1月15日の条には、江の島と片瀬が陸続きになり、僧侶・俗人など多くの参詣者が向かう様子が記されています。

相模国江嶋明神有託宣、大海忽変道路、仍参詣之人無舟船之煩、始自鎌倉国中繼素上下成群誠以末代希有神変也(下略)

(相模国江嶋明神託宣あり。大海たちまち道路に変わる。よって、参詣の舟船の煩いなし。鎌倉よりはじめて、国中繼素(しそ)上下群れなす。誠にもって末代希有の神変なり。)

僧侶も俗人も、多くの人が徒歩で参詣していることが表現されていますが、地震などで陸地が隆起したことによるものだったのでしょうか。それについて、推測できる記述も『吾妻鏡』に見られます。

さまざまな天変地異

建保年間、鎌倉や京都に地震が頻発した時期で、

この年の3年前の建保元年5月21日には、午の刻(昼前後)に鎌倉に大地震が発生しています。その地震について『吾妻鏡』には、

午剋大地震。有音舎屋破壊。山崩地裂。於此境近代無如此大動云々。

(午剋。大地震あり。音有り舎屋破壊す。山は崩れ地はさける。この境において、近代かくのごとき大動なしと云々(うんぬん)。)

とあり、この地震で鎌倉が甚大な被害を受けたことがわかります。このような大きな地震によって江の島付近が隆起し、干潮など他の要因が重なることによって、舟を使わずに徒歩で参詣できるようになったことが想像できます。

地震の他にも、建保4年は、2月には日食と月食、3月には赤潮が発生した年でもあります。通常ではあまり目にする機会のない自然現象は、当時の人々におそれを抱かせたに違いありません。

科学万能の今となっては何気ない自然現象も、神仏の仕業とした中世の人たちは、今よりもっと信仰の対象が身近な存在だったかも知れません。

建保という時代

この頃の将軍は実朝でしたが、彼は公家を招いて和歌を作るなど、幕府と公家政権の融和を図っています。しかし、これらの地震などがやがてくる承久の乱の予兆だとしたら『吾妻鏡』もドラマチックなものになるでしょう。(伊井)

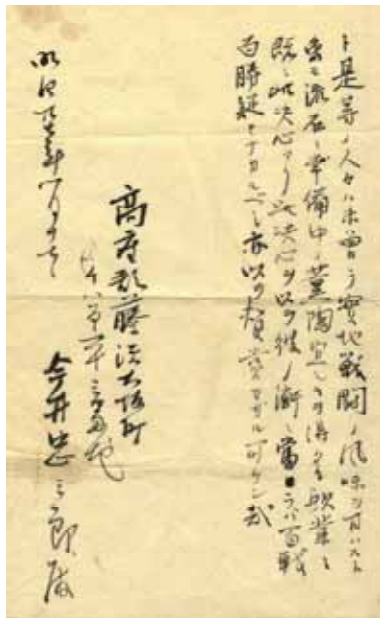


『吾妻鏡』(寛文三年後刷版)

(『特別展 鎌倉北条氏の興亡』神奈川県立金沢文庫編集発行、2007年、26頁より転載)

連載 古文書の読み方 第19回

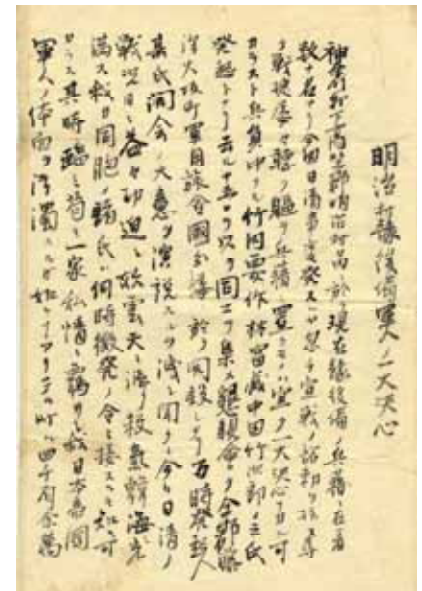
「明治村予後備軍人ノ一大決心」



資料3頁目



資料2頁目



資料1頁目

上の資料「明治村予後備軍人ノ一大決心」(縦24.5×横16.5cm)は、明治 27(1894)年 8 月 27 日に、今井忠三郎なる人物あてに記されたものです。表題で記された「明治村」とは、現在の藤沢市羽鳥地区にあたり、「予後備軍人」とは、予備役軍人と後備役軍人をさします。予備役とは、現役(陸軍 2 年・海軍 3 年=昭和 2(1927)年の兵役法による)を終了した軍人が服する兵役の区分で、陸軍 5 年 4 か月・海軍 4 年の服務年限がありました。ここまでが常備兵役とされ、軍の編成上の骨幹をなすものとされました。

後備兵役は予備役の終了者が服する制度で、陸軍では 10 年、海軍では 5 年がそれにあてられました。この期間が終了した者たちは、40 歳にいたるまで「第一国民兵役」に付くことになりました。なお、日本の男子は満 17 歳になれば、何人を問わず、まず「第二国民兵役」(40 歳まで)に編入させられました。

この資料では、日清戦争開戦後の 8 月 15 日に、ある町のある「軍用旅舎(旅館)」で開催された、明治村の予後備役軍人たちによる懇親会の模様が記されています。日清戦争は、近代日本が体験した初の本格的な対外戦争であったため、兵士たちも非常に意識を高揚させている様子がうかがえます。兵士たちがさまざまな技芸を出し合ったこの懇親会は夜の 10 時まで続いたと、この資料には記されています。

(問題)予後備役軍人たちによる懇親会がもたれた町の名と、旅館の名前は何でしょうか？(解答は次号)

編集後記

司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』のテレビ放映により、日清・日露戦争に新たな光が当てられようとしています。登場人物の一人である乃木希典は、敗戦後は忘れられた存在になりました。その落差を象徴するのが、乃木の銅像が戦後行方不明になったこ

とでしょう。消えた銅像が第 1 面の写真になります。

「古文書の読み方」では、日清戦争最初期での郷土と兵士の対応をとりあげました。この資料からは、旧明治村の兵士たちの心の高ぶりの一端がうかがえます。近世の「お家流」とは違った近代の文字にも親しんでいただければ幸いです。(中村)